

丈夫で武骨な京地張り式提灯から もれる光と竹骨の影が美しい。

小嶋俊 京都／提灯職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)が、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェア一家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーションにて



1月24日、プレゼンテーションにて

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMAPRAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(KAREBALAGE/代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。



プロダクトへの思いを語る

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。京都府選出の匠、提灯職人の小嶋俊さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

明かりから非日常空間を彩るものへ

和紙を全面に張らず、竹骨を部分的に見せた提灯。内部から照らすと、通常は和紙に隠れている竹骨の影が拡散され、天井や壁に模様として浮かび上がる。複数つると影と光が複雑に交差して、幻想的な効果を生み出す。「宿泊施設など非日常の場所に使うと、情緒豊かな空間になります。京都を訪れる世界中の人に、提灯の明かりが醸すせいたくなどを体感していただけるのでは」と、小嶋さんは言う。



小嶋商店、工房の様子

約半世紀前、祖父が手がけたカンス型(そぼん玉)のような形の提灯があった。その型は一度しか使われなかったが、面白い形だったので、今回のプロダクトで復活させたいと願った小嶋さん。生駒氏は、「提灯にはA1では出せない温かな揺らぎがあるし、どんなに時代が進歩しても消えない魅力を秘めている。伝統の技を継承し、祖父が考えた型をよみがえらせた」というストーリーも良いですね」と評価された。

原型は直径120cmと大きかったため、現代のインテリ



サポートメンバーの生駒氏と

アに用いやすいようサイズダウンした直径50cmの型を、新たにおこしてプロダクトに取りかかった小嶋さん。しかし製作してみると、円形に比べ横から見た傾斜が急なので、一枚の紙をたわみなく張るのに困難を極めた。あれこれ考え、紙を半分に切って張り合わせることで解決したという。さらに他の伝統産業との融合を試み、西陣織に使われる伝統技法の一つである引箔を用いて光源とは異なる輝きを加え、照明として美しいデザインが完成した。そして当初は、洋室にマッチするスタンドタイプを考えましたが、別注するスタンドに高額の製作費と大量注文というロットの問題が生じてしまったため、悩んだ末提灯本来の吊り下げタイプに落ち着いた。

江戸時代から受け継ぐ京地張り式の技



今熊野から京都タワーを望む



使い込まれた作業道具の数々



0.1ミリ単位で竹を削る作業

店は、小嶋さんと弟の諒さんで10代目になる。

代々手がける提灯は、「京地張り式」。まず、竹を削って作った太めの骨を、和紙で留めて輪っかを作る。この輪っかを型に沿って組んでゆき、糸で一本一本結わえて補強する「糸吊り」を施す技法だ。竹ひごをらせん状に巻いて紙を張る「巻き骨式」に比べて手間のかかる仕事だが、出来上がった提灯は竹と糸がおりなすラインが武骨な美しさを放ち、丈夫でもある。

もともと提灯というのは分業制で、竹骨作り、和紙張り、文字や絵をのせる作業は別々の店が手がける。それを提灯屋に卸すため、個々の店や職人が表に出ることはないそうだ。しかし貴重な技が廃れることを危惧した小嶋さんは、かつては和紙張り屋だった自店ですべての工程を手がけるよう志す。小嶋さんが竹を割り、弟が和紙を張り、父が絵をつけるという家内分業で個々のスキルを磨き、精度の高いものづくりをかなえてきた。

また、従来は神社仏閣など



精度の高い伝統の技術

点すと、明かりがほのかに揺れ、紙を張っていない部分の竹骨が壁面に影をつくりだす。伝統工芸でありながら、現代の空間にフィットする照明が誕生した。

「形の面白さに目覚めたので、これからのいろんなデザインに挑戦したい。今回、全国の様々な職人と出会い、つながれたのは大きな収穫です。新たな素材の相談をしたり、あの匠の作品を提灯の明かりで照らせば面白いだろうとか、あの匠とのコラボはどうだろうなどアイデアが湧くのも、本プロジェクトのおかげです」と、小嶋さん。

そして次なるステップは作ったものをどう広げるかだ。プロジェクトの発表会やフランスへ行って痛感したのは、作って売っただけでなく、経験を売ることが重要だということ。職人としてのものづくりのしっかりした下地を備えつつ、それを見てもらえる仕掛けをしたい。人が携わったものを介して人が交流するよう、感覚的なものを大切にしていきたい」と、小嶋さんは将来への展望を語った。



竹骨の影が壁に映し出された京地張り式提灯「豊灯」

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT



小嶋 俊
京都／提灯職人

創業寛政年間、京地張り提灯小嶋商店10代目職人。兄弟共に高校を卒業後家業である、小嶋商店で提灯製造に励む。京提灯の地張り式製法の「武骨で丈夫」な提灯に惹かれ家業を継ぐことを決めた。2013年に灯りブランド「小菱屋忠兵衛」を立ち上げ内装照明、インスタレーションを中心に京提灯の魅力を発信している。